

『ニェートチカ・ニェズヴァーノヴァ』

—物語の構造と意味を求めて—

金 沢 美 知 子

ドストエスキイ（以後Dと略記。）の初期作品が流刑以後の彼の中・長編小説に比して研究対象になることが少ない中で、『ニェートチカ・ニェズヴァーノヴァ』（『H』と略記）もその例外ではない。更に、未完であることも原因して、作品の長さや流刑以前の創作活動の最後の時期に発表されたという事実にも拘らず、『H』は『貧しき人々』、『分身』程にも重視されていない。しかし、初期作品の物語の構造と意味を明らかにし、それをDの創作の歩みの中に位置づけるという筆者の一連の試みにとって、『H』は未完ながらも重要な意味を持つものとして本小論で取り上げられている。猶、従来の研究書に見られる『H』への言及⁽¹⁾は、作品の文体及び構成について、登場人物の形象及びモチーフについて、作品のイデーについての三つに分類する時、第二のものが最も多い⁽²⁾。文体及び構成に関する言及も少なくはない⁽³⁾が、表面的、断片的な指摘に留まり、物語の構造と意味を探る上で不満足感を拭き切れない。筆者は他ならぬこの構造と意味に注目し、更に『H』が回想という形式をとっていることを考慮して以下のような手順で作品を考察している。最初に叙述の方法（即ち、いかに語られているかという問題）を検討し（Ⅰ）、次に叙述の内容（即ち、何が語られているかという問題）の検討に移る（Ⅱ）。そして最後に、これらを踏まえた上で、Dの作品にしばしば見られる手記の形式と関連させつつ、叙述の意図（即ち、何故語られているのかという問題）について問いたいと考える（Ⅲ）。

付記：従来の研究では殆どの場合1860年以後の版が中心に据えられているが、筆者は、初期作品のとしての『H』を考察の対象としている為、1849年版をテキストとして用いている⁽⁴⁾。

Ⅰ 叙述の方法（いかに語られているか）

§0 『H』の叙述上の特徴は回想という形式⁽⁵⁾に深い関係がある。ここでは、語り手ニェートチカ（Hと略記）による過去の事件の叙述の方法を、個々の事

件⁶⁾が叙述される仕組み (§1) と複数の事件が話題として処理されるやり方 (§2) の二つの角度から検討しよう。

§1 個々の事件の叙述され方

『H』に於て、個々の事件の叙述は以下のような形で具体化されている。

① 事件が、事件に対する主人公及び語り手の反応⁷⁾によって叙述上の変形を受けていない場合。そこでは、事件がそのまま客観的事実として示される。

1. Он умер, когда мне было два года от рождения. (стр. 142/стр. 434⁸⁾)
2. Мой отчим был музыкант. (стр. 142)

② 事件が、事件に対する主人公Hの反応によって叙述上の変形を受けている場合。

1. мне показалось, что всё, нас ожидавшее, было так важно,.....(стр. 166) (省略は筆者による。以下も同様。)
2. с самого начала вселилось в меня темное подозрение, что какая-то тайна лежит на всем этом.....(стр. 228)

③ 事件が語り手Hの反応によって叙述上の変形を受けている場合。その際に語り手の反応には、直接事件へ向かうもの(例文1)と主人公H(かつての自分)の反応へ向かうもの(例文2)が見られる。

1. Я помню, что боль в руке, усиливаясь всё более и более, нагнала на меня лихорадку. (стр. 161)
2. Но до сих пор не понимаю, почему именно могло войти мне в голову, что отец мой такой страдалец, такой несчастный человек в мире! (стр. 160)

②, ③(事件が反応による変形を受けているもの)に関しては、反応がどのように表現され、叙述に取込まれているかに触れておく必要があるだろう。(猶、①についての検討は事件自体の検討であるからここでは取り上げない。)

まず、量的に多く、最も明確な形で表われているのは事件への主人公又は語り手の対峙行為そのものを提示しつつ、その対象である事件を叙述する場合である。знать, понимать, угадывать, чувствовать, думать 等の動詞が大半の場合、接続詞 что を伴って表われ、この接続詞によって事件への言及が導かれる。その他、特に主人公の対峙行為の提示には、наблюдать, замечать, рассуждать, воображать, 語り手の対峙行為の提示には помнить, запомнить, припоминать の使用が目立つ。又、この種の構文に準ずるものとしては、

кажется (, что...), казалось (, что...) が頻出する。

しかし、事件への反応は語り手H又は主人公Hの対峙行為そのものを提示することによって描かれるだけではない。特に語り手の反応はしばしば疑問文、感嘆文

1. Но почему я была уверена, кто подсказал мне, кто научил меня, что он меня любит более, чем матушка? (стр. 161)

2. она всё еще могла любить его! (стр. 181)

又は特定の見解を示す形容詞及び副詞が構文の中に編み込まれる形

1. Теперь в моем пораженном воображении начали рождаться какие-то чудные понятия и предположения. (стр. 162)

(下線は筆者による。以下も同様)

2. но как-то странно понятен был для меня смысл слов батюшки... (стр. 162/стр. 437)

に於ても明確に表われている。

こうして反応による事件の変形は多様な表現の中に認められるが、その際に叙述内での両者の立場が逆転し、事件の描写に比して反応の描写が極度に肥大し、事件の描写を圧迫する場合がある。

Но до сих пор не понимаю, почему именно могло войти мне в голову, что отец мой такой страдалец, такой несчастный человек в мире! Кто мне внушил это? Каким образом я, ребенок, могла хоть что-нибудь понять в его личных неудачах? А я их понимала, хотя перетолковав, переделав всё в моем воображении по-своему; но до сих пор не могу представить себе, каким образом составилось во мне такое впечатление. (стр. 160)

訳文：しかし、いったい何故、私の父がそんな受難の身で世にも不幸な人間だなどと思いついたものやら、今だにわからない！ 誰がそんなことを吹き込んだのか？ どうやって私みたいな小さな子供が彼の身の不幸を多少なりとも理解できたのか？ が、自分勝手に解釈し、自分なりの想像で一切を作り変えてしまったにせよ、私はそれを理解したのだ。しかし、どうやって私の中にそんな印象が生まれたのやら、今だに考えつかない。

ここでは、父親の惨めな姿や失敗が語 это, их, такое の中に押し込められる一方で、それに対する主人公及び語り手の理解や想像が執拗に繰り返し描写さ

れる。

この文章に端的に表われているように、『H』の叙述に於ては事件の描写にもまして、事件への反応の描写が重要なものとなっている⁽⁹⁾。叙述は多様な表現を用いて反応を巧みに取り込み、反応を強調する。このような特徴はDの初期作品に既に認められ⁽¹⁰⁾、『H』だけに固有のものではない。又、過去の事件の叙述に見られるこの特徴は『H』以後の作品にも確実に受け継がれていくのである。

§2 事件群の叙述され方——複数の事件の処理

概してDの作品には、全体又は一部に手記の形式が適用されているものが多い。しかし、語られる過去の時間的な長さ、過去と語る現在の距離、語る現在の時間的移動の程度等の点で、語り手による手記の形式にも様々な変種があり、全てを同一視することは危険であろう。現に、『H』の叙述形式は、叙述の時点から隔った過去が語り手の回想の対象となっており、しかもその過去が時間的な拮がりを有している点で、『H』以前の初期作品の手記の形式と大きく相異している⁽¹¹⁾。『H』の形式のこの特質は、中・短編小説の物語世界から長編小説のそれへと踏み出した所に位置しているこの作品に、多数の事件をプロットの内に吸収する可能性を与えた。それと同時に、事件と事件を縫合し、事件から事件へ移行する為の叙述上の工夫を要請することにもなった。こうして、『H』の叙述のもうひとつの特徴は、個々の事件を繋ぎ合わせて一つの回想へとまとめるべく、複数の事件を処理する方法の中に表われることになる。

§2-1 『H』には、事件を叙述全体の中に取込んで他の事件の叙述と結びつけ、複数の事件を整理する機能の強い表現が目立つ。

① 新たにそして本格的に事件の叙述に取りかかるもの。

1. Я забыла сказать, что... (стр. 192)
2. Но несколько слов о том, что... (стр. 223)
3. Теперь начинается новая история. (стр. 224)
4. Теперь я расскажу одно странное приключение,... (стр. 238)
5. Вот как это случилось. (стр. 239)

② 一度話題にした事件について再度言及するもの

1. Я уже говорила, что... (стр. 173)
2. Я уже сказала, что... (стр. 179)
3. как я уже сказала,... (стр. 240)

4. Я упоминала уже, что... (стр. 250)

③ 後に取りあげる事件を先取りして予め部分的・概略的に叙述したり、事件の叙述を中断して続きを留保するもの。

1. В свое время мне придется очень много и гораздо подробнее говорить о нем. (стр. 190)

2. Я объяснюсь впоследствии. (стр. 207)

3. Но эта история еще впереди. (стр. 208)

①, ②, ③は比較的多く見られるものであるが、それに加えて

④ 事件について既に為された叙述を訂正するもの

В прочем, я неправду сказала, говоря, что... (стр. 191)

⑤ ある事件の叙述の際に、読者がそれを理解する為に必要な知識を提供すべく、別の事件の叙述を挿入するもの

1. Нужно заметить, что... (стр. 173)

2. Нужно знать, что... (стр. 210)

等がある。又、〈(某所から) 聞いたところによれば〉や〈誰某の話では〉の類の情報入手の事情を示す表現を以て、情報内容の叙述にとりかかる場合や、事件に対する語り手の対峙行為の表現として §1 で言及した помню, припоминаю が整理の機能を強く帯びている場合等も挙げられよう。

以上のような形で、事件は話題として取り上げられ、打ち切られ、あるいは延期される。それは必ずしも理路整然とした叙述の進め方ではなく、しばしば読者に煩雑な印象さえ与える。更に上記の表現は、話題の転換や整理が語り手によってかなり恣意的に行なわれているという印象を生み出す一因となっている。このような叙述は『H』以前の作品にも認められるが、『H』では事件の増加に伴ってより顕著なものとなっている。

§2-2 数多くの事件を整理し一つの回想へと編み上げる工夫は、作品の構成と深く結びついている。とりわけ重要な特徴として、(1)事件群が分順されていること、(2)事件から次の事件への叙述の進め方に見られる^{パターン}型に注目しておきたい。

(1)『H』の最初の版(「祖国雑記」に掲載されたもの)では書かれた部分が三つに分けられており、各々「第1部、幼年時代」(第1, 2, 3章に対し)、「第2部、新しい生活」(第4, 5章に対し)、「第3部、秘密」(第6, 7章に対し)と題されている。更に、研究者達の多くが『H』を文体と主題の点で独立性の強い幾つかの物語の集まりとして捉えている^四。

この作品では、事件群がHの成長に沿って区分された三つの期間（第一の時期：父母とHの三人暮らしの時期。これには父親の若い頃の物語が最初に付されている。第二の時期：X公爵家で暮らした時期。第三の時期：アレクサンドラ・ミハイロヴナとその夫の許で過ごした時期）に配分されており、三つのうちの一つの時期に属する諸事件の叙述の中で、別の時期の事件が言及されることは極めて少ない。（第一の時期についての思い出は第二、第三の時期に於て時折言及されるが、そこで語られているのは具体的な事件と言うよりも、漠然とした悲哀の感情や、苦痛の思いである。）即ち、叙述されている諸事件は過去の互いに隔たった時点で起きたものではあっても、いずれも三つのうちの同じ一つの時期に属している。又、稀にその時期に属さない事件が挿入される場合でも、それは、それまでこの事件が主人公Hの視野に入らなかったことによって、どの時期にも属し得ない場合である。こうして、三つの時期は主人公の成長に沿って為された単なる時間的な区分に留まらず、各々独立した三つの世界としての相貌を強く呈している。

(2)事件から事件への叙述の進め方は、物語の背景である長い時間の流れを処理する方法の中に表われている。『H』には、時間を処理する三つの基本的な形が認められる。

a. ある期間の事件群を概括的に描写する方法。〈このような事件が毎日繰り返された〉、〈一定期間続いた〉等の叙述により、事件の反復性、持続性、しばしば日常性が強調される。この種の叙述では各事件の個別性、特殊性は無視され、多数の事件が一括して描写されている。叙述は、諸事件についての知識や印象を整理し、次の叙述を用意（即ち新たな事件を導入）する。一般に、物語はこのような概括的な叙述のみによっては成立し得ないからである。

b. aとは逆に、ある事件を取り上げて具体的に描写する方法。〈例えばこんなことがあった〉、〈突如こんな事件が起きた〉等の形で始められるこの種の叙述では、事件の個別性、特殊性が強調される。叙述は一つの事件を拡大し、事件に詳しく分け入り、事件の具体的なイメージを展開させることを専らとしている。

c. ある期間、時間を省略する方法。〈○日×時間が経過した〉旨を指摘したり、〈○日×時に（なった）〉という形で次に叙述する事件の時間的背景を与えることにより、ある期間の諸事件を叙述の上で省略する方法。この種の叙述は、しばしばa又はbの方法と結びついた形で具体化している。

1. (a + c) Так прошел этот день и следующий. (стр. 221)

2. (b + c) На третий день, утром, Настя принесла мне записку от Кати. (стр. 222)

Дの作品としては異例な Bildungsroman の構造を持つ『H』に於て、方法 a と b の組み合わせが叙述の進め方の特徴となっており、特に語り手によって自分の直接的な体験が語られている部分では、物語の構造を規定する大きな因子となっている。

例えば、第2章では幼いHの父母との生活が描かれており、彼女の精神的な目覚めは日常化した両親の不和の中で始まっているが、このような不和反目の日々の中から、とある夕方の両親の喧嘩の場面が話題として取り上げられ、「今も覚えている、黄昏時のことだった」という形で語り始められる。この、日々繰り返される数々の喧嘩から抽出されたいわば特別な事件と、それがもたらした父親と自分の急激な接近等についての叙述の後で、語り手は再び自分の日常を概括的に描く。その際に語り手は、自分がお使いの途中でしばしば人々を観察したことに触れており、続いて、多くのお使いのうちのひとつを再び特別な事件として取り上げる。(この事件は、先のとある夕方の両親の喧嘩の場面を受けて、「前の時にもまして父との奇妙な接近を助けてくれたもうひとつの出来事」と形容されている。)
 「ある時、夜9時過のことだった」という言葉で、この事件即ちお使い帰りに父と共に赤いカーテンの建物を見たことについての叙述は始まる。(以上 стр. 158-161.) このように、反復される行為や持続する状態を概括的に描写し、時にはそれに対する感想や説明を付け加えておいて、次にそれらの中の特殊な事件を「ある時」、「ある日」、「ある晩」等の言葉を以って具体的にとり上げる形は第2章に多い。又、逆に、ある具体的な事件の描写を受けて、そうした事件が繰り返される旨、事件によって引き起こされた状態が一定期間続く旨が指摘される場合も度々見られる。先の例で言えば、ある晩赤いカーテンの建物を父と共に見て以来、幼いHが「毎晩」、「魔法のお城のようなこの建物を窓から眺め」て空想を逞しくすることが叙述されている。(стр. 163.) こうして、a (ある期間に亘る事件群を概括する方法) による叙述を受けて b (特別な事件を具体的に描写する方法) による叙述を発展させる型、b による叙述が a によるそれへ引き継がれる型は、第2章全体の叙述の基本型となっている⁴⁾。

ところが、親子三人の日常生活を描いた第2章に続いて、ある著名なバイオリニストの演奏会を契機とする父エフィーモフ (E と略記) の破滅と母の死を扱った第3章では、極めて特殊な事件群が取り上げられ、それが数日間に急

転する様が時の経過に即して具体的に叙述されている為、 $a-b$ 及び $b-a$ という型は影を潜めている。演奏会の日を中心として、「その二日前」、「その前日」、「当日の朝」に何が起きたかという形で事件に具体的な描写が施され、いわば $b-b$ の型で叙述は進行する。

以上に指摘した第2章と第3章に於ける叙述の進め方及び第2章から第3章へのこのような変化は、第4章と第5章、第6章と第7章に於ても認められる。即ち、公爵家へ移ってからのHの日常を扱った第4章と、この家で公爵令嬢カーチャ（Kと略記）と出会ってからの彼女の生活を扱った第5章前半は主に $a-b$ の型、HとKの急速な接近（五日間の出来事が中心になっている）を描いた第5章後半は主に $b-b$ の型によって叙述が進行する。同様に、新たにKの義姉アレクサンドラ・ミハイロヴナ（Aと略記）の家で始まったHの生活を描く第6章及び第7章の初めは $a-b$ の型、日々Hの関心の的であったAの秘密をめぐる事件が急転する第7章後半は $b-b$ の型によって叙述が進行するのである。（但し、第6章の初めでは、Aの性格描写にかなりの頁数が割かれており、その為にはそこでは具体的な事件の描写が見られない。）

以上の点から次のことが結論される。即ち、『H』に於て、 $b-b$ 型は事件の急転つまりカタストロフの叙述に、 $a-b$ 型はカタストロフを招来するところの日常的背景の叙述に用いられている¹⁴⁾。

『H』以前の初期作品の大半は、短期間に起きた単一の事件についての物語であった。これらの作品と異なって、『H』が未完ながらも長編小説の構造を持ち得ているのは、[長期間に亘るある〈事件〉の漸次的進展（破局の潜伏）+短時日に於ける〈事件〉の急転（破局の到来）]の繰り返しによって展開するプロットと、この展開を具体的に実現する [$a-b$ - …… + $b-b$ -] という叙述の進め方に依るものである。この、長い年月に亘る主人公の生涯を継起的に扱うという形式は、Dの作品に於ては極めて特殊な例であり、後の長編小説に見られるように、たとえ長い過去を背景とする場合でも、物語世界の現実としては短期間、特に人間の生の危機的瞬間が扱われることが多い。即ち、『H』を経て再びDの作品は短期間に展開する事件群についての物語へと立ち返っていく。従って、まだ模索の過程ながらも、多数の事件又は〈事件〉の多様な相を物語の中に取り込むという課題を一応実現し、Dの文学に於ける物語世界の拡大の契機となった作品として、『H』を位置づけることができよう。

II 叙述の内容（何が語られているか）

§0 テキストに示された語句をそれが与えられた順に拾う作業に支えられつつ、読み行為が作品の意味内容を目指して飛翔するように、筆者も叙述の方法から叙述の内容へと論を進めたい。但し、ここでいう叙述の内容とは作品のテーマ及びイデーのことではなく、寧ろそれらを内包する場としての物語世界のことであり、テキストの旺溢する語句の中から浮かび上がってくる物語の立体的な像のことである。『H』の物語像に接近する為に、作品の主要な二つの相——成長の物語と家族の物語——及びそれら相互の関係を検討することがここでの課題である。

§1 成長の物語

先に叙述の方法を取り上げる中で、事件に対する主人公Hの反応について言及したが、この反応即ち事件に対峙する姿勢（観察、認識、空想等）自体が、主人公の成長の物語を作り上げている。即ち『H』では主人公Hの関心の対象、対峙する姿勢の変化の方向、変化の契機と事情等が物語の重要な因子となっているのである。これらの諸点に留意して、各時期の物語を以下に整理する。

第一の時期（第3章まで）に於ては、父と母の関係及び父母と自分の関係が主人公Hの関心の対象であり、彼女の内面生活は父の性格や父の身に起きた事件（しばしば彼女が体験を共にしている）によって強く刺激されている。彼女は、母から逃がれて父との関係に没頭することを願い、その際に母に対するこのような冷淡さがもつ意味を奇妙な三角関係によって故意に曇らせる。このような事情の下で形成された結果、Hの世界観は母への負債の感情即ち罪の意識に深く支配されており、その為に、罪（自己の罪であると他人の罪であることに拘らず）に対するナイーブさは彼女の後の成長にまで尾を引くことになる。（第二の時期に於けるラーリャとの出会いの場面や、第三の時期に於ける罪の問題への彼女の深い関心等にそれが表われている。）⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

Hが公爵家で過ごす第二の時期（第4、5章）には、彼女と孤児ラーリャ（Jと略記）の出会い（第4章）及び彼女とKのロマンス（第5章）が物語の中心となっている。HとJの出会いについての叙述はHとKのロマンスについての叙述に比して量的には少ないが、Hの成長の物語にとって重要な意味を有している。自分が行なった両親への非情な仕打ちを後悔し、彼らの死の責任が自分にあると思込んでいる少年Jに出会って、Hは激しく動揺する。彼の罪の意識に接し、彼の苦悩を分わち合うことにより、Hはそれまで他ならぬ自分の内に潜在していた母親への罪の意識を明確に自覚する。この罪の意識は少年が公爵家から去って後もHをしっかりと把えて離さず、彼女は苦悶の内に時を過

ごした後、ある事件を機に重態に陥るのである⁴⁴。一方、第5章でのKとHのロマンスは、HがJとの出会いによって引き起こされた精神的な病から快復する物語としての意味を持つ。二人の少女の個性の接触に於て、出会いの初めからKに魅了されるHには内面的な成長は見られない。成長するのは寧ろKであり、彼女の関心はHという新しい世界に向けられている。[KへのHの恋情に対して、Kが反発しつつ内的葛藤に苦しむ]というドラマを繰り返す中で、新しい個性に対するKの理解は徐々に変化し、遂にその敵対的感情が共感的理解、愛情へと変貌する。Kのこの内的ドラマは他の家人の働きかけによって触発され、そこに、この時期の様々な事件が生じている。一方、Kの内的ドラマに立ち合うHは、まず第一の時期と異なって既に独自の立場を得た存在であり、更に彼女の観察の対象が第一の時期のそれ（父と母と自分の関係）とは異なって、自分と同等又は寧ろ下位の世界である為に、大きな混乱と動揺に捕われることがあまりない。彼女はKの内的ドラマをほぼ掌握し、理解に満ちた目差しで見守っている。従って、ここでは叙述の調子も第一の時期のそれとはかなり異なっている。

第三の時期（第6,7章）に、HはAとその夫の家庭で数年を過ごす。ここで彼女の関心を引くのは秘密に充ちた夫婦関係であるが、その一方で、彼女は、まだ明瞭に意識しているわけではないが、自己の模索に深く心を奪われている。彼女の内面生活は二つの作業、即ち夫婦関係に潜む謎の究明と自己探索に費される。それらは罪の問題に深く関わっている点で共通し呼応し合うものである。しかし、前者は後者を誘発しながらも結局はその十分な進展を許さず、家庭を充たしている憂鬱へとHを押し戻す。彼女の精神活動を完全な停滞の危機から救うのは、日々の生活からは予期できないような偶然事（図書室の鍵の発見、歌の才能の発見、手紙の発見等）である。概してAとAの夫とHの三者は内面生活では孤立し、相互に積極的に接触して激しい変化をもたらすこともなく、Hがこの家庭に迎えられた当時と同じ重苦しい緊張関係を持続していく。第三の時期の最後に漸く、夫とHの衝突を機に事件の急激な展開が始まるが、ここで物語は永久に途切れてしまう。

以上の概観からわかるように、どの時期の物語も家族（血縁関係又はそれに準ずるもので結ばれている者達）・家庭（家族関係を中心として構成されている集団・社会）と内的な連関を有している。Hの関心は専ら家族間のドラマに向けられている。家庭は主人公の生活環境であるだけでなく、その内面世界を全面的に作り上げている。彼女は家庭の他に世界を想像することがない。この

ことは、父母との三人暮らしの、不和と貧困に充ちた家庭を嫌って外部世界へ飛び出した主人公が、新たに生きる場として見出したのが再び家庭（X 公爵家）であるというプロットと対応している。

物語は、Hが第一の家庭から逃亡し、第二、第三の家庭を渡り歩く形をとった。その為に、主人公の世界は家庭に終始し、物語は主人公の社会的行動や思想的発展のドラマではなく、感情教育の様相を強く帯びることになった。

更に、先の概観からわかるように時期毎に異なった背景をもつHの成長の物語に於て、Hの生きる姿勢がダイナミックに変化し、独自の世界観を彼女が得るのは、第一の時期だけである。第二、第三の時期の物語では、Hは他者の罪と不幸に立ち合う中で、内省と自己洞察を繰り返しつつ過去（第一の時期）の体験に対する理解を深めてゆくのである。物語は、Hが第一の家庭から逃亡し、第二、第三の家庭を渡り歩く形をとった。つまり、第一の家庭、原初の家庭からの逃亡、即ち母からの逃亡の記憶に付き纏われて、第二、第三の家庭に於て主人公が逃亡という自分の行為の意味を探り続けるドラマが、物語を貫流しているのである⁴⁴。

§2 家族の物語

『H』の成長の物語という相と関わって、家族の物語という相が浮かび上がってくるのが、既に確認された。家族の物語は次のような形で具体化している。

まず、この作品に於ける人間関係は家族関係を中心としている。

次に、プロットは主として家族関係即ち、

第一の家庭（父、母、Hの三人の家庭）では親子関係、夫婦関係

第二の家庭（X公爵家）では、親子関係、夫婦関係等

第三の家庭（Aの家庭）では、夫婦関係等

に縛られた家族構成員各々が、関係の破壊又は修正を計るところに生じる諸事件によって形成されている。例えば、

第一の家庭では、妻への夫Eの敵意、Hの母への冷淡な態度及び母からの逃避（夫Eと娘Hのこうした態度がHの母親の死をもたらす）

第二の家庭では、Jの物語に於て言及される両親へのJの冷淡な態度、及び、まだ表面化していないが、公爵とその妻の静かな摩擦

第三の家庭では、夫に対する妻Aの、及び妻Aに対する夫の敵意を挙げる事ができる。家族関係の中でも真の血縁関係、特に親子の関係は絶対的であり、ひときわ大きな重圧となっている。『H』以前の作品では、家族

の問題が物語の中でこのような役割を担っているものは殆どない。(『主婦』のカチェリーナの回想に登場する家族は例外⁹⁹。)『H』を経、後期の長編へと発展する過程で初めて、家族の意味がより深く追求されることになる。

最後に指摘しておきたいのは、家族に対する主人公Hの関わり方についてである。主人公は三つの家庭のいずれに於ても、家族間のドラマに巻き込まれていくと同時にそれを観察する存在でもある。行為者と観察者の相貌を合わせ持つ主人公像は、家族の問題が扱われている場合に拘らず、Dの作品にはしばしば見られる。従ってここで特に注目されるのは、主人公のこの像が家族の物語と結びつく時、彼は家族にとって半ば内側半ば外側の存在として登場し、彼の家庭は由緒ある家庭ではなく、「偶然の家庭」として描かれることである。物語の構造との関わりから考えるならば、主人公が深く内部の人間として関係に引き込まれつつ同時に他人でいられるような家庭が、まさに継父、私生児、不義の子等の要素を持つ無秩序と混乱に充ちた家庭として表われるのは、いかにも自然なことと言えよう。「偶然の家庭」は『未成年』の中で明確に概念づけられた。しかし、それは既に、僅かにヴァルヴァーラの手記(『貧しき人々』)、カチェリーナの回想(『主婦』)を経た後の『H』に於て、物語全体の構造に関わる形で導入されているのである¹⁰⁰。

このような、作品の構造にまで深く関わる形での家族という要素の導入は、Dの文学に於ける物語の新しい側面を切り開いた。

1. 家族という要素は出生及び幼時期の体験と結びつきやすく、出生に端を発する主人公の生が問われることが多い為、事件を彼の人生全体の中に意味づけるという視点が作品に導入されること。『H』ではこの視点は、語り手が自分の半生を回想するという形式の中に直接的に表われている¹⁰¹。

2. 処女作『貧しき人々』以来、Dの初期作品の中に既に繰り返し登場している罪のモチーフが、家族という要素と結びついたことにより、新たな意味を獲得したこと。罪のモチーフは『H』以後、必ずしも家族と結びついた形でのみ登場するわけではない。しかし、例えば『カラマーゾフの兄弟』に見られるような、血の問題との関わりの中での罪の意識の追求は、明らかに『H』でのこのモチーフの変質を踏まえたものである。

むろん、この作品では、人生の意味や血のもつ深刻な問題はまだ十分に掘り下げられているわけではない。しかし、家族及び家庭が単なる物語世界の空間ではなく、物語に於けるひとつの意味論的な場として作品に一度定着したことは、Dの以後の創作に独自の方向を与えたのである。

III 叙述の意図（何故語られているのか）

§0 多様な事件又はある〈事件〉の多様な相を扱って、かなり規模の大きい作品となっていることもあり、『H』の叙述は均一ではない。語り手は語る内容に応じて語り口を変える。では、このような叙述によって、語り手は自分の過去をいかなる光のもとで照らし出そうとしているのか。いかなる狙いで回想を綴っているのか。

§1 『H』の叙述は、語り手Hが事件に対するかつての自分の理解をどのように受けとめ、語る際にどのように処理するかということに、大きく影響されている。この問題、即ちHの過去と現在の二つの立場の関係は次のように整理される。

① 事件に対する語り手Hの理解が、体験当時のそれとほぼ同じ（方向と程度に於て）であり、かつての理解をそのまま又はより生々しい形で受け入れて事件を叙述している場合。例えば、〈——であったのを覚えている〉の類の表現。

② 語り手Hの理解によって、体験当時のそれが補強され明確化されている場合。このような叙述に於ては、体験当時曖昧だった事件の意味が、語る現在に於けるより多くの知識や深い理解力、時にはより説得性のある推測に助けられて明確になる。

• По некоторым словам этого разговора, которые я до сих пор упомянула, заключаю, что..... (стр. 167)

訳文：その会話の中の今でも覚えている二、三の言葉から、〈…〉ではないかと判断する。

③ 語り手Hの理解によって、体験当時のそれが否定されたり不明確にされている場合。語り手Hはかつての自分の理解を疑問視したり、異なった解釈を提示したりする。その際に、二つの立場の間の矛盾はしばしば十分に解消されないまま放置され、事件の意味は不可解なものとして残る。

1. я обвинила матушку, признала ее за злодейку моего отца, и опять говорю: не понимаю, как такое чудовищное понятие могло составить в моем воображении. (стр. 161./стр. 437)

訳文：私は母を責めた。父を苛める悪者にしてしまったのだ。繰り返し言うておくが、どうしてこんなとんでもない考えが私の頭に浮かんだものか、私にはわからないのだ。

2. Я как-то было уверена, что он заступится за меня. Но почему я была уверена, кто подсказал мне, кто научил меня, что он меня любит более, чем матушка? (стр. 161)

訳文：私はなぜか、彼（父——筆者）は私を庇ってくれるだろうと信じていた。しかし、何故私は信じていたのだろうか？ 誰が私に仄めかしたのだろうか？ 誰が教えたのだろうか？ 母よりも彼の方が私を愛しているなんてことを。

ひとつの事件に対するHの過去と現在の二つの立場の間にとりわけ強い緊張が生じるのは③の場合であり、この時、読者は事件の意味についてのひとときわ注意深い読みを要求される。このような叙述は特に第2, 3章に多く、上記の例からもわかるように、かつての自分の態度に対しての疚しさを語り手が吐露する件りに集中的に表われている。幼い自分がとった母親への冷淡な態度及び父親への偏愛、母親の死に関する父親との共犯に対して、語り手は罪の意識を感じている。しかし、彼女は罪の意識を率直に告白するかわりに、過剰な注釈や弁明によって事件の意味を曇らせる。

§2 事件の意味の曖昧化は語り手の像及び物語の像に大きな影響を与えている。

語り手Hは事件に対する自分の知識と見解を正直に暴け出さず、一部を示して一部を隠蔽し、結局事件の意味を不明瞭にし続けておく、いわば狡猾な語り手である。このような語り手の特徴はHの作品にしばしば見られるものであり、手記であるとないと拘らず、語り手の現前の程度が強い初期作品にも既に認められる。『分身』はその顕著な例である。しかし、『分身』では語り手の立場の曖昧さによって事件の客観的存立までが危いものとなっているのに対し、『H』に於ては真相の明不明に関わりなく、事件の客観性は保証されている。語り手の立場の曖昧さが事件の客観性を侵蝕しない点に、『分身』から『H』への発展が認められると言えよう。

C. E. パッセージは語り手Hの年齢、生活及び過去の事件への態度の不明さに言及している。しかし、語り手の立場の曖昧さは単にこれらのものの不明さによるのではない。物語世界の現実に登場しながらも職業、年齢、名前等の不詳な語り手は『H』以前にも見られる（『ポルズンコフ』、『ヨールカと婚礼』）が、語り手Hには彼らに比して多くの背景が与えられているにも拘らず、叙述にはそれらの作品にはない曖昧さが纏っている。これは、『ポルズンコフ』及

び『ヨールカと婚礼』の語り手の叙述の意図——自分が見聞きした事件を伝達すること——が明確であるのに対し、語り手Hのそれが曖昧な為である。語り手Hは年代記作者的な語り手に徹して、自分の過去を客観的に叙述為果すことができない。例えば、『H』の第5章でのKとのロマンスの叙述に於ては、主人公及び語り手の過剰な反応が見られず、Hの二つ（過去と現在）の立場の間の摩擦も少ない（語り手がこのロマンスに距離をもって対していることがわかる）が、一方、母親の死を以って終わる第2,3章や、Aの秘密の罪をめぐって奇妙な三角関係が展開する第6,7章では、語り手は事件を鮮明な形で直接的に叙述するのではなく、真相を曇らせようとするかの如く、事件のあからさまな伝達を避ける。（これらの箇所には、какой-то, какая-то, какое-то, что-то 等の不定代名詞及び как-то, как будто の頻出はこうした印象の形成に預っている。）そこでは叙述の恣意性が感じられ、語り手の私的性格が強まっている。又、この恣意性、私的性格が強いこれらの箇所は告白を目的とする叙述に近づいている。

告白の叙述形式は罪の物語に親しい²²⁾。『H』の文体に関しては、度々女性の思惟方法と語り口による特徴が指摘されてきた²³⁾が、筆者は、それにもまして、罪人の思惟方法と語り口が叙述に与えている影響をこそ注目すべきだと考えるのである。初めから告白の体裁を与えられ、告白＝罪の意識という図式が明瞭に認められる場合に限らず、Hの作品には、年代記作者的な立場をとっている筈の語り手が、突如叙述に於ける恣意性を示し、その私的性格を発揮することがしばしばある（『悪霊』の語り手）。特に、語り手が、事件全体ではないにせよ、どの部分かで事件と私的な関係を結んでいる場合に、比較的明確にこうした現象が認められる。

『H』は回想の形式で書かれている。しかし、自己の体験についての回想であるとはいえ、語り手Hは過去の事件を歪曲し、捏造するわけではない。これまでの考察で明らかになったように、彼女は事件の多くを（又は多くの相を）客観的な事実として描写する中で、自己の過ちに触れる部分では巧妙に言葉を濁し、事件の意味を隠蔽するのである。

こうして、事件の客観性を保証しつつ、語りの意図を曖昧なままにしておくことにより物語から安定した相貌を奪うような叙述は、『H』に於て初めて確立した。語り手Hは自分の過去の体験を語る。だが、彼女はそれを単なる事件として読者に伝達しようとしているのか、それとも自己の秘められた痛みに関わるものとして告白しようとしているのか。そして、読者は年代記の読み手と

なるべきか、聴聞僧となるべきなのか。このような迷いを絶えず読者に強いることにより、叙述は読み行為の幅を拡げ、緊張感を高めることが可能になっている。蓋し、『H』の叙述が読者にこの迷いを強いるのは叙述自体に内在する特質によるのであり、物語が完結した形を有していないからではないことを付言しておきたい。

以上、三つの角度からの考察によって浮かび上がった諸点及びそれらの連関の中に、『H』の構造と意味を見ることが出来る。又、それは『H』以前の初期作品群から『H』への物語世界の発展、即ち『H』がDの創作の歴史に於て持つ意義の一端を覗かせてくれる。

注(1) 本小論での考察に際して用いた主要参考文献——これらは皆、『H』の考察に独立した章又はかなりの頁数を割いている——は以下の通りである。

Мочульский, К., Достоевский. Жизнь и творчество, YMCA-Press, Париж, 1947.

Фридлиндер, Г. М., Реализм Достоевского, Изд. «Наука», М.-Л., 1964.

Frank, Joseph, Dostoevsky. The Seeds of Revolt 1821-1849, Princeton Univ. Press, New Jersey, 1976.

Rassage, Charles E., Dostoevski the Adapter, Univ. of N. Carolina Press, Chapel Hill, 1954.

Terras, Victor, The Young Dostoevsky (1846-1849), Mouton, The Hague. Paris, 1969.

Trubetzkoy, N. S., Dostoevskij als Künstler, Mouton & Co., 1964.

- (2) 登場人物の中では特にイエフィーモフの形象に関する研究が多く、『H』の中心に彼の物語を見る傾向が強い。(J. フランク, C. パッセージ, V. テラス等。)『H』と他作品(バルザックの『ガンバラ』等)との類似の指摘も彼の形象に依拠して為される場合が多い。その他、作家によって惘眼な分析を施された子供及び女性の心理や夢想家のモチーフに関する言及、後の作品の登場人物達の原型としてのニエートチカ、カーチャ、アレクサンドラ等の形象の考察も見られる。
- (3) 回想形式である点、女性の手記である点、Bildungsromanの構造を有している点等の指摘。
- (4) テキストとして、下記の書に所収のものを用いた。本論での引用は全てこれに依る。

Ф. М. Достоевский, Пол. собр. соч. в 30 томах, т. 2, Л., 1972.

但し本書に印刷されているのは1866年版である為、筆者はこれに付されているヴァリアントを参照しつつ再構成した1849年版を、検討した。

- (5) 現在残っている初期の草稿の断片から推察すると、『H』は作者による三人称の叙述形式の作品として構想されたこともあり、それ以前のDの作品に既に多出していた手記の形式が安易に踏襲されたわけではないことがわかる。

- (6) 以下で用いる「事件」は、現実にて外面化した行動及び状況を意味し、心理的レベルでのそれらは含まない。
- (7) 以下で用いる「反応」は、事件によって引き起こされた知的感情的な諸現象（理解、印象、記憶等）を意味する。事件を見たり、聞いたりする行為は含まない。
- (8) 引用文に付した頁数は、上記したД30巻全集の第2巻のそれを示す。猶、/стр. はヴァリアントの頁数。
- (9) Дは1860年の版改訂に際して、1849年に掲載されたものに対し文体上の整理を試みている。そこでは形容詞、副詞、動詞、代名詞等の省略が見られるが、それに比して、語り手の反応を示す語（помнить 等）の省略は殆ど見られない。
- (10) その顕著な例として『分身』を挙げることができる。『分身』が、理解しにくい物語であるとの指摘は作品発表当初のペリンスキイの評以来しばしば為されてきた。（『ペテルブルグ文集』。）この作品が難解であるのは、必ずしも主人公ゴリャートキンが狂人だからではない。彼は観察し推測し計算する。しかし、これらの行為即ち反応には論理的一貫性がありながらも、反応の対象即ち事件（具体的には、彼の日常に於ける煩瑣な事件群）に関する情報は不充分かつ断片的な形でしか読者に与えられていない。これが大きな原因となって、事件及びそれと深く関わっている彼の行為は読者にとって奇異なものになる。事件についての十分な描写が反応の描写によって寸断され圧迫されるところに、意識の怪物化という印象が生じる。それは、主人公が世間的な観点での狂人であると否とに無関係であり、『H』にも見られる特徴である。
- (11) 『H』以前の作品の中で手記の形式をとっているもの（登場人物の手記も含めて）は多数あるが、その殆どが多くても一、二年から五、六年前の過去に関する物語であり、特に『貧しき人々』の各書簡や『白夜』の語り手による手記は極めて近接した過去を叙述している。又、これらの作品に於ては、叙述の対象も一晚、数日間又はせいぜいが数ヶ月間に亘る事件である。
- (12) K. モチュリスキイは作品が主題と文体の面で三分されることを指摘し、Г. М. フリードレンデル、J. フランクも三つの部分に分けて考察している。C. E. パッセージは寧ろ、文体の相異、物語内でのHの役割の相異等に注目して、作品を二分する（第1, 2, 3章と第4, 5, 6, 7章）。N. S. トゥルベツコイも最初の三章を他からの独立性の強い物語と見做し、それを一括して検討する。又、V. テラスはДの分類に従って第1, 2, 3部に分けて考察を進める中で、第2部と第3部の連絡性（Hとカーチャのロマンスに関する物語による）及びそれらからの第1部の独立性（ラーリャの物語が1860年以後の版で削除されたことによる）を指摘している。以上のように、従来の研究に於ては分類の際の視点に若干の相異が見られる。
- 猶、本論で各章を指示するに際し、筆者は便宜上、1860年以後の版での通し番号（1～7）のみを使用した。
- (13) ある特殊な事件の叙述は、しばしば、事件にもたらされた突然の別れや病いによって中断されている。例えば、ラーリャの物語、Kとのロマンスの物語等の中断。
- (14) この点に関して留意しておきたいこと。

a—b型の叙述は、物語世界の現実に於ける事件の時間的な前後関係（因果関係と言いかえてもよい）に強く依存している場合と、前後関係はなくとも、語り手の都合（即ち語り手の心理的な原因や叙述上の便宜）で採用されている場合がある。従って、a—b型の叙述に於ては、事件の前後関係はしばしば不明瞭である。

- (15) 『H』の罪のモチーフに関し、特にJ.フランクとV.テラスが、母親へのHの嫌悪、母親殺しの願望、及びラーリャの物語に注目している。

cf. Frank, J., p. 351, p. 357–358; Terras, V, p. 104–105, p. 145–147.

- (16) 『H』の登場人物の行為のうち、罪の相貌を帯びているか、又は何らかの形で罪と表現されているものとして、イエフィーモフ、H、Л、K等の行為が挙げられる。（X公爵に関しても同様の推測が許される。）又、作品中に преступление（及び преступник, преступная）、проступок, вина（及び виновен）、грех（及び грешны грешница）、порок 等、罪に類する概念を表示する語もかなり見られる。

- (17) この物語は1860年以後の版では削除された。最初の構想では後で本格的に登場する予定だったЛが、未完に終わった『H』では不必要になった為であろう。しかし、この削除は、作品に於けるЛの物語の前後のつながりを不自然なものにしている。Лとの出会いの後に続くHの苦悶と精神的発作は、Лとの出会いの後に続き、Лの物語を得て初めて意味を持つからである。

- (18) 成長の物語という相は、認識する者としての主人公Hの像に大きく依拠している。彼女の行為を示す наблюдение, воображение, впечатление, думать, рассуждать, наблюдать, замечать, угадывать 等の語が、事件を体験するに留まらず、幼くして既に事件を解釈し、人生の意味を探ろうとするHの像を与えている。猶、認識する者としてのHの行為の両極に観察（наблюдать）と空想（воображать）が認められる。

- (19) 『H』と『主婦』にはモチーフの上で類似点が多い。これは両者が同じ時期に創作されていたことにも大きな関係があると思われる。稿がまとまり雑誌に掲載されたのは『H』の方が後であった。従って、作品の構成はかなり相異してはいるが、そのモチーフ、テーマに於ては両者は相互に連絡し合いつつ発展したものと推測される。（特に、母親に対する娘の罪の意識に関して。）

- (20) Д.グリシンは、Дが『H』の中で случайное семейство のテーマに触れていることを指摘している。但し、具体的な考察はない。

cf. Гришин, Д. В., Ранний Достоевский, Мельбурнский университет, Австралия, стр. 207.

- (21) 家族・家庭という要素が断片的、部分的にもせよ持ち込まれている『H』以前の作品に於て、家族・家庭及びそれを背景とした過去をもっているのは女である場合が多い。男にこのような背景が与えられている場合でも、例えば『主婦』のカチェリーナの家族とオルディノフのそれ（父親のこと）との比較からわかるように、女に付与された家庭の方がプロットにとって遙かに重要な意味を有している。（下図参照。）『H』以前の作品では、男と女の明確な役割分担が見られるのである。即ち、女は家庭を与えられた形で登場し、女の相手である男はそれを持たず、勤務及び下

宿生活のみを背景とする孤独な存在として登場しており、両者の関係がドラマとして描かれる。その際に、女は人生上の背景は与えられていてもしばしば小説から脱け出したような虚構的な臭いが強いのに比して、背景をもたぬ根無草的な存在である男の方が、現実と対決し、現実的課題に取り組む役割を担っている。

『H』に於て初めて、家庭を背景とする女が、男の主人公の相手としてではなく、自ら生活し、人生の意味を考える主人公として登場した。後期の作品では、男も又家庭を背景として現われる。

作品名	主人公	その相手
『貧しき人々』	ジェーヴシキン	: ヴァルヴァーラ
『分身』	ゴリャートキン	: クララ
『主婦』	オルディノフ	: カチェリーナ
『弱い心』	ヴァーシャ	: リーザ
『白夜』	夢想家	: ナスチェンカ

- (22) Л. Гроссманは《Стилистика Ставрогина》で、告白の文体、Ich-Erzählung への D の強い関心に触れつつ、この形式の基本的特徴として、構成の中心となるのが隠れた罪についての物語であることを指摘している。

cf. Гроссман, Леонид, Стилистика Ставрогина. — в кн: 《Поэтика Достоевского》, М., 1925, стр. 158–159.

- (23) 女性に特有の思惟方法と文体に関しては、V. テラスの研究書に詳しい。著者は、『H』に於てジョルジュ・サンドの文体の模倣が見られることを指摘し、女の語り手による叙述の具体的な特徴に言及している。

cf. Terras, V., p. 102–103.

《Неточка Незванова》——О структуре и смысле романа

Митико КАНАДЗАВА

В Настоящей статье рассматриваются структура и смысл незаконченного романа 《Неточка Незванова》, одного из ранних произведений Ф. М. Достоевского. Предметом анализа являются следующие проблемы: I. метод повествования (то есть, как велось повествование); II. содержание повествования (то есть, о чем велось повествование); III. цель повествования (то есть, т какой целью велось повествование).

I. **Как**: В этой главе исследуется структура романа с двух точек зрения: во-первых, каким образом повествователь рассказывает каждое отдельное событие? (§ 1); во-вторых, каким образом он переводит рассказ с одного события на другое и упорядочивает много событий? (§ 2); В изображении отдельного события важную роль играют воспоминания, толкования,

впечатления и т. д. героини Нечки и повествователя Нечки. Далее автор статьи замечает, что для структуры этого романа характерно соединение общего изложения многих событий с конкретным изображением особого события.

II. О чем : В этой главе автор ставит перед собой цель рассмотреть две главнейшие истории, которые определяют содержание романа, а именно : историю духовного формирования героини Нечки и историю семей, в которых она проживала—и раскрыть связь между одним и другим. Автор приходит к следующим выводам : три семьи, изображенные в этом романе, являются не только сферой жизни героини, но и основой ее внутреннего мира ; На формирование мировоззрения героини воздействует прежде всего ее сознание своей собственной вины, которое неразделимо связано с воспоминаниями первой семьи, в частности, с воспоминаниями о смерти матери. Итак семьи в «Нечке», в отличие от почти всех предыдущих произведений писателя, воплощают саму идею и тему романа.

III. С какой целью : Некоторые стилевые характеры в этом романе объясняются неясностью позиции повествователя Нечки, неясностью цели ее повествования. Она то излагает прошлые события объективно, прямо и откровенно, то затуманивает смысл событий, не раскрывая того, что знает о них и какое отношение имеет к ним. В последнем случае бросается в глаза субъективное, своевольное изложение, которое выявляет тайное беспокойство повествователя. Такая неясность цели повествования замечается во многих из произведений Достоевского, в том числе и «Нечка».

Итак, путем анализа трех вышеуказанных проблем, разьснятса структура и смысл романа, и при этом раскроетса сходство «Нечки» с другими, особенно предыдущими произведениями писателя, и ее отличие от них, что прояснит значение этого романа для развития поэтики Ф. М. Достоевского.